



## 賞タポ有り「800字小説バトル」参加者募集

---

[本会場はこちらです](#)

[http://texpo.jp/texpo\\_book/toc/5414](http://texpo.jp/texpo_book/toc/5414)

### 参加者募集

みなさんこんにちは。

何だかんだで、テキスポも開設から4年を迎えました。

そのお祝いとしまして、恒例の800字小説バトルを開催します。

800字小説バトルも今回で10回目。

企画者のモリタポ財布の都合もあって、ここでひとつ区切りをつけたいので、

今回是非とも、ご参加くださいませ。

### 基本方針

800字で掌編小説を書いて投稿してください。

「3つのお題」を参考にしても、しなくてもOKです。

投稿作品の中から、☆☆☆投票&企画運営者の選考ののち、

グランプリ&入選作が選ばれます。

今回、テキスポが死亡したときのために、必ず、他サイト等へ、

「避難掲載」するようにしてください。

グランプリ作品には500モリタポ、入選作には100モリタポを贈呈。

今回、主催者あやまり堂のモリタポ財布が淋しいので、そんな感じで開催します。

入選作品は「800字文庫」として編纂し、テキスポ上で発表されます。

800字という限られた文字数で世界と人物を描き、

さらにストーリーを展開させるのは至難の技。

ここは書き手の技と意地が炸裂、激突し、切磋琢磨の闘技場のようなことになること間違い無し。

腕まくりをしてのご参加をお待ちしてますー！

## 募集要項

---

[本会場はこちらです](#)

[http://texpo.jp/texpo\\_book/toc/5414](http://texpo.jp/texpo_book/toc/5414)

### 応募資格

テキスポにログインできる人

作品をパブー上に作成する企画本に転載して問題ない人。

### 投稿ルール

とりあえず、800字くらいで短編小説を書いてください。

その際、以下の3つのお題を使っても、使わなくてもOKです。

お題は、執筆時の目安、方針が必要な場合に、お使いください。

また、厳密に800字じゃなくても無問題です。

### お題

【 これで最後 】

【 商店街 】

【 手袋 】

これらのお題は、使っても、使わなくてもOKですー。

### 投稿方法

投稿ルールに沿った内容で、テキスポで本・テキストを作成してください。

出版後は「投稿場所」コメント欄に「800字小説投稿しました」と書き込み、

投稿する本・テキストのタイトルとURL

それから「避難掲載した他サイトのアドレス」

を貼り付けてください。

募集期間後、審査のため、投稿作品を集めて新たなテキスポ本とパブー本を作成します。

コピペでつくるので、ご了承ください。

### 募集期間

11月25日（金）～12月18日（日）

※「投稿場所」へのコメント投稿時間、12月18日23時59分まで、って感じをお願いします。

多少遅れても気にしません。

投票・審査（・読書）期間（予定）

12月19日（月）～1月9日（月・祝）

年末年始、ゆっくり読んで下さい。

一般からの☆☆☆投票と、運営側による審査を行います。

審査員は、運営しているあやまり堂と、善意の審査員。

ただし、テキストがぶっこわれた場合は、パブー版やツイッター等で、

「みんなで感想を述べる会」に切り替わります。

特別賞について

☆投票だけじゃ物足りない！ 俺が5ツ星で推した作品が下位になるとは納得できん！

そういう方は、是非とも、あやまり堂宛に推薦文（メッセージ）をお寄せください。

対象作品に、「入選・特別賞」を、授与して、あやまり堂から賞タポをお送りします。

モリタポが足りない場合は、済みませんが、名誉だけをお送りします。

結果発表

2012年1月11日（水）ぐらい

賞タポ

グランプリに選出された作家さんには、500モリタポ、

入選された作家さんには、100モリタポを進呈します。

入選数は、全応募作の3分の1前後の予定ですが、

主催者のモリタポ財布の都合によって増減しますのでご了承ください。

掲載について

募集期間後、審査のため、投稿作品を集めて新たなウェブ本を出版します。

コピーします。

またグランプリ作品、入選作品は「800字文庫」に編纂し、

テキスト上および、パブー上で発表されます。

注意)

投稿規定に沿っていない作品は、原則として掲載されません。

「800字文庫」に編纂する際、作品の一部を編集する可能性があります。

宣伝のため、更新が無くても、時々不意にトップ掲載します。

## 投稿作一覧

---

こちらは用心のため、基本的には、テキスト以外の掲載場所を書いて行きます。

(投稿順・敬称略)

1)

「ヒューマンライト」 シゾワンプー

<http://ncode.syosetu.com/n8715y/>

2)

「買い物」 胡曼堂書房

<http://www.geocities.jp/expoita/texpo/41969.html>

3)

「帰郷の際に」 七篠史明

[http://blogs.yahoo.co.jp/ethnic\\_beat/1838420.html](http://blogs.yahoo.co.jp/ethnic_beat/1838420.html)

4)

「Immortal Man(不老不死の男の独白)」 香吾悠理(エビル)

<http://p.booklog.jp/book/39742>

5)

「これが最後」 みる

<http://ncode.syosetu.com/n9579y/>

6)

「真冬のさよなら」 三毛猫

<http://texpo.jp/texpo/disp/41988>

7)

「最後の祭り」 山田佳江

<http://yamad.dtiblog.com/blog-entry-72.html>

8)

「優しい週末」 アマモリトオル

<http://p.booklog.jp/book/3080/page/776335>

9)

「住人と色」 木林森太郎

<http://goo.gl/Zq19C>

10)

「12月23日、深夜」 冬雨

<http://ncode.syosetu.com/n0213z/>

11)

「今日で最後にしよう」 ジュニー

<http://texpo.jp/texpo/disp/42114>

12)

「銀座商店街幻想」 茶屋休石

<http://p.booklog.jp/book/40667/page/798139>

13)

「岐路の一答」 芋屋だーら

<http://texpo.jp/texpo/disp/42132>

14)

「銀座商店街戦争」 茶屋休石

<http://p.booklog.jp/book/40667/page/805935>

15)

「つないで」 たきてあまひか

<http://amahika.tumblr.com/post/14396288074>

16)

「プレイ・ア・ロール」 アマモリトオル

<http://p.booklog.jp/book/3080/page/808861>

17)

「さよなら、テキスポ星人」 U. C. O.

<http://ucoo.web.fc2.com/hall1/goodlucktexpian.html>

18)

「波打ち際商店街」 ひやとい

<http://ana.vis.ne.jp/ali/antho.cgi?action=article&key=20111219000029>

## ちょっとした注意事項

---

[本会場はこちらです](#)

[http://texpo.jp/texpo\\_book/toc/5414](http://texpo.jp/texpo_book/toc/5414)

※何か不明・不審な点があったら、こちらへどうぞ。

0) テキスポって何？

そういう小説サイトがあるのです。

0. 5) 何でパブーでやってんの？

テキスポが不安定だからです。

1) テキスポ不安定じゃん。

バトル期間中、ほぼ間違い無く、テキスポは死亡します。

なので今回は、「他サイトへの避難掲載」を必須とし、

「一覧本」「入選作品集」はパブー上にも掲載しますので、そこはご了解ください。

2) 投稿後の修正、改変について

無問題です。

※ただし、コピペによって審査用「応募作一覧」ウェブ本を作成するので、

最終日あたりに修正する場合だけ、「微修正アリ」と、教えていただくと嬉しいです。

3) 複数投稿は？

歓迎しますー。

4) エッセイか詩なら書けるけど

小説バトルなので、「自分の中では小説です」と言い張れるものにしてください。

5) 入選作って誰が決めるの？

基本的に一般投票結果と、あとは審査員の独断で決めます。

それから読者の皆様からの「特別賞」もお待ちしています。

6) 特別賞って？

審査期間中に、あやまり堂のプロフィール画面から[このユーザーにメールを送る]を選択、

「コレイイ！」

って作品について、特に推薦文を送ってください。

特別賞として表彰し、賞タポをお送りします。

7) 編集さんが行方不明だけど？

あきらめてください。

8) 審査員やってやっても良いぜ。

お願いします。何なら、共同執筆者に登録いたしますので、あやまり堂までご連絡ください。

9) 原稿データが壊れた！

テキスポは不安定です。必ず、バックアップをとっておいてください。

主催者あやまり堂は、バックアップを取れないかもしれません。

10) テキスポ初めてなんだけど？ どしたら良いの？

この辺をご覧くださいー！

[はじめての方へ - テキスポマニュアル](#)(テキスポ運営)

その他ご不明・ご不審な点は、こちらにお寄せ下さいー！

## 避難場所・他サイトへの避難掲載について

---

[本会場はこちらです](#)

[http://texpo.jp/texpo\\_book/toc/5414](http://texpo.jp/texpo_book/toc/5414)

ご存知の通り、テキスポはたいへん不安定です。

バトルイベントが開催されると「まず、こわれる」と思っておいてください。

バックアップが必須です。

必ず、他サイトへの避難掲載を行って下さい。

基本的に、ぶっこわれた際も、避難場所、ツイッター、パブー上を通じて進行しますが、

☆投票ができないので、最終的に復活が無かった場合は、

「みんなで読んでみんなで感想を書くバトル」

に切り替わるかもしれません。

避難場所、兼テキスポぶっこわれ時の進行地

<http://texpo.dou-jin.com/>

ぶっこわれ時の速報

<http://twitter.com/ayamarido/>

パブー版発行予定地

<http://p.booklog.jp/book/39623>

「人類のために戦ってきました」

客席についた裸の青年が言った。

身につけているのは黒いパンツだけで、裸足だった。

寂れた商店街にある潰れかけの店とはいえ、ここはソバ屋だ。こんな奴は困る。

だが主たる省三が気付いたときには、もうこいつは席にいた。

黒革の手袋をテーブルの上に置いて。

省三は睨み、低い声で言った。

「それでえ？」

青年は安らかな表情と澄んだ瞳で応える。

「食べ物を」

「金えあんのか？」

「悪との戦いにおいては、誰も金銭的支払いをしてくれないのです」

青年の目は、狂気によって澄み渡っている。

省三は諦めた。

「食いてえ物言いな、昔はおめえみたいな可哀想な奴を、商店街の持ち回りで世話したもんだ」

三十分後、井に顔を突っ込んでいる青年に向かって、省三は尋ねた。

「おめえ、どうやってここまで来た、そのカッコでよ？」

「手袋の力で。最後の力を使い果たす前に、たどり着きました。お礼にその手袋を受け取ってください」

「フン」

「ごちそうさまでした」しばらくして食べ終わると、青年は何事も無かったように店から出て行く。手袋を置いて。

「あっさりしたもんだ」省三が呟いた直後、女の悲鳴が聞こえた。

裸の男が歩いていけば、当然の反応だった。まさかこの手袋、本当に……。

省三は手袋をつかんで店を飛び出し、裸の青年の足元に手袋を投げつけた。

「御代はいらねえよ！」

青年は身をかがめて手袋を取り、両手にはめた。

「暖かい。あなたの善意がこもって、手袋に活力が戻りました」

青年の裸身から、みるみる汚れが落ちていく。輝くような姿になって彼は言った。

「これで最後、なんてことはないんですよ、人の善意に」

それだけ言うと、青年の姿は消えた。

「世の中、計り知れねえ……」

省三は呟き、立ち尽くすばかりだった。

初出：

「ヒューマンライト」 シゾワンプー

<http://ncode.syosetu.com/n8715y/>

『買い物は、みんなニコニコ手袋駅前商店街で。』

ノイズ混じりの形式ばった女性の声が、見上げた電柱のスピーカーから聞こえて来た。そのスピーカーの声は、大音量の夕焼け小焼けのメロディに掻き消されてしまう。茜色の夕焼けが、商店街をオレンジ色に染めあげている。天まで見上げるような高層ビルも、オレンジ色に光ってポツンと立っていた。

酒屋さんの前から、荷物を載せた原付バイクがブーッと音立てて走り出した。コカ・コーラの自動販売機に、キリンレモンとチェスタの自動販売機。米屋さんの店先には、プラッシーや塩専売の看板が掛かっている。本屋さんに布団屋さんにレコードショップ。金物屋さんのショーケースの中には、ナショナル坊やが置いてある。電気屋さんの看板には、日立カラーテレビと書いてあった。あれは、ポンパ君だ。

♪ベーベーパー、ベーベーパー...。

けたたましい電子音のとおりゃんせのメロディが鳴ると、巨人帽の子ども達が笑い声と共に脇を走り抜けて行った。

駄菓子屋の店先に置いてある明治アイスクリームの大きなアイスケースには、もう鎖が掛けられていた。おもちゃ屋のおじさんは、緑色のコスモスのガチャガチャを片付け始めている。

肉屋さんの前を通り過ぎると、コロッケをあげる匂いが漂って来た。「これで最後。これで最後だよお。」魚屋のおじさんが、手を叩きながら、人通りのまばらになった通りで、声を張る。街灯がチカチカと瞬きながら、道路を照らしはじめた。

とある店先で足が止まった。

「すみません、ケースの中のこれ下さい。」お店の人は、買った品物を丁寧に包んでくれた。「はい、おつり。どうもありがとうね。」お店の人の笑顔に送られ、軽く会釈をして店を出た。

ガララララッ...。背後でシャッターを下ろす音が聞こえた。振り返ると、ビルの谷間でコンビニの明かりが煌煌と輝いているのが見えた。

星のほとんど見えない夜空の下、じっと両手の平の中を見つめた。

初出：

「買い物」 胡曼堂書房

<http://texpo.jp/texpo/disp/41969>

<http://www.geocities.jp/expoita/texpo/41969.html>

去年の冬。仕事をある理由から辞め、帰郷した時の話だ  
私の育った町は、町と呼ぶのも憚れるほどの田舎町だった  
都市からの交通は電車を何本も乗り継ぎながら、実に半日  
電子マネーも対応していない、申し訳程度の改札がある駅で私はホームに降り立った。

駅前には「笠江商店街へようこそ！」の派手な宣伝を備えたくたびれたアーチを筆頭に  
これまたくたびれた我が町の商店街が鎮座している。

時代の流れに取り残されたような風景の中では、それでも流れる時間に抗えずに  
一つ、また一つと帰郷の度にシャッターを下ろす店が窺える。

その中で珍しくまだその日の営業を終了していない（田舎の店は夕方頃には閉まってしまう。  
都会と違うのだ）

婦人服の店を見つけた。

トメさん御歳63歳。

旦那さんは6年程前に亡くなり、一人で店を切盛りしていた。

最近はやを痛めて、仕事をするにも中々苦勞する事が多くなったようだ  
近所の人たちは云々。

と、店の前を通りかかった私を呼びとめ矢継ぎ早に話しかけてきた（なぜ田舎のおばあさんは  
こんなに早口なのだろうか）

元気なご老人で、こうして話す上では腰は弱っているのか？ と疑問に思うくらい澆刺として  
いた。

その後、私も手伝い店の閉店準備を終えた時だった。

彼女は淡い濃緑色の手袋を差し出してきた

あなたの様な素敵な方にきっと似合うでしょう、と代金は手伝ってくれた分で良いと。

私はそんなつもりで手伝ったのでは無かったので丁重にお断りしたが

元気ではあるが、私もいつお迎えがくるか分からない。会うのがこれで最後かもしれない  
それに日が落ちるにつれ寒くなる。あなただけのものではないし手袋一つでも違うから是非。  
と、半ば押し付けられるように受け取った。

深々とお礼をし、その日私は沈む太陽を追いかけるように実家への帰路を急いだ。

手元は暖かったが、それよりも心と体が熱を帯びた気がしていた。

そして今年、私は一人の男性と田舎への電車で揺られている。

男性の腕には小さな生命が抱えられて、淡い濃緑色の手袋を玩具代わりに弄んでいた。

トメさんは元気だろうか？ あの駅を降り立ったらすぐにこの人と、この子と挨拶に行こう。  
そう思い、流れる景色を眺めている。

初出：

「帰郷の際に」 七篠史明

<http://texpo.jp/texpo/disp/40898>

人々が言う、私は「イモータルマン」だと。

ある国の言葉で不老不死の男。

ああ何百回目かの冬が来る。

これで最後だと言いつけて、疲れて自分の心臓にナイフを突き立てた。

無駄なことだと気づき、旅をすることにしている。

世界は回り、戦争がおこり、国はいくつも別れて合併を繰り返す。

「イモータルマン」になる条件は意外に簡単だった。

今はもう存在しないけれど、昔は存在していた、人魚。

その心臓を食べるだけ。

戯れに食べた心臓は生臭い、としか覚えていない。

いつだったかな、「イモータルマン」になったのは。

記憶の彼方、思いだそうとしても無理というもの。

生まれたのもいつだったかな。

そういえば、ある青年がいた。人魚の心臓を探して人魚に食われた。

青年よ、死の無い生活は案外疲れるぞ。

木枯らしが吹く、人々の衣装も変わり、賑わうのは城下町。

このローブも、さすがに三十年使ってはぼろぼろだ。

当時新品の毛織物も三十年でぼろ布に変わった。

そろそろ、新しいローブと手袋がほしい。

この国に来たのは百回、周っていない国などないが、ここが一番豊かで盛んに商店が出ている。

気に入った、これを買おう。

ああ何百回目かの冬が来る。

世界が変わって人が何千何万何億死んでも私は変わらない。

病に侵された国王に呼ばれた。

お前は「イモータルマン」かと。

「条件は何か」と震える手で聞いてくる。

死を恐れる哀れな老人を私はみつめた。

「人魚の心臓を食べるべし」と告げれば、たちまち老人は激怒。

「童話の話をしろとはいっておらん！」  
城を追い出された。

童話の時代から生きているのか。  
「イモータルマン」も中々疲れる。

ああ何百回目かの冬が来る。  
新調したローブもいつかやぶれるけれど、手袋は今は暖かい。

ああ何百回目かの冬が来る。

初出：

「Immortal Man(不老不死の男の独白)」 香吾悠理(エビル

<http://texpo.jp/texpo/disp/41980>

<http://p.booklog.jp/book/39742>

朝、自宅から会社まで歩いて出勤する。

石畳の階段を下り急な坂から海岸へでる。湾に沿う道路は長い商店街通りだ。役所の前から住宅街を通過する。此処から上り坂だ。鬱そうと木々が生い茂り昼間でも暗い林を抜け小さな池を過ぎると上り坂が終わり国道を右に折れて会社は直ぐだ。40分かかる。

晩秋の朝は遅い。6時に家を出たら外はまだ真っ暗だった。街灯が無いので足元が見えない。携帯をライト代わりにコケで滑らないよう恐る恐る降りる。古い石段の途中にある細い獣道から不意に何か飛び出してきた。猪？と思い息を呑んだが、携帯の明かりに見えたのは人間だった。ホッと私は声をかけた「おはようございます」

だが脅かされて不機嫌になったのかその人は返事もしない。

持っていたバイクのヘルメットを被り私とは反対方向に階段を上がる。私は近視なので誰だか解らなかったが知っている人なら嫌だなと思った。

あけぼのは、田舎の景色全ての輪郭を映し出そうとしていた。左に見える海はだがまだ黒い。私は持っていたパンを持ち直す。池の傍にある家のガレージで私が毎日行き過ぎるのを見ている犬にあげるのだ。私と犬との逢引だ。だがそれも、これで最後だ。恋人の住む街へ行くことになったから。思えば長い春だった。私達の愛は年月を経て漸く実った。思うだけで心が温かくなる。

林が見えてきた。直ぐに池だから私の靴音を聞いてワンちゃんは尻尾を振っているに違いない。ふと先ほどのヘルメットの人がいるのに気がついた。

思い出した。この人は家の裏に住むご老人の甥っ子さんだ。

確かいつもお金の無心に来て困るからもう絶対貸さない、とご老人がぼやいていた。

広島って聞いたけれど、ヘルメットということはツーリングで来たのかな？手袋もしているものね。

「先程はどうも」と言ってその人の横を通り過ぎた時だった。

激しい衝撃に襲われた。

苦しい、息ができない。

え？私に何が起きたの？目がくらみ、倒れこんだ。

やっと目を開けたら目の前にパンとさっき見た手袋が落ちていた。

犬の吠える声が聞こえた。

そう、きっと待っているのだわ。

私の来るのを待っている。

行かなくちゃ。だが、力が入らない。

ああ、空が明るくなってきた。今日は秋晴れね。

薄れていく意識の中で私は恋人を思った。

-----  
初出：

「これが最後」 みる

<http://texpo.jp/texpo/disp/41986>

<http://ncode.syosetu.com/n9579y/>

「これで最後……なのね」

わたしは毛糸の手袋で包まれた両手にハアとあたたかい息をふきかけながら、寂れた商店街の片隅に佇んでいた。目の前には不機嫌そうに眉をしかめるクラスメイトの男の子。

「ねえ、全部なかったことにして、もう一度、初めからやり直すことはできないのかな……？」

上目遣いに、彼をみつめる。どうしても、わたしにはあきらめることが出来なかったから。

「そんなこと、出来るわけがないだろう？」

彼は無情に首を横に振った。

「だって、いくらなんでも、ひどすぎると思う」

……三十回もしたのに。なのに、そんなに冷たい顔で終わりを告げるなんて。彼には情という物がないのだろうか。わたしが、これほど想っているのに。恋焦がれているのに。

「……いつまでそこでそうしているつもりなんだ？」

「ねえ、お願い！ もう少しだけ、待って」

わたしは小さく深呼吸して気持ちを落ち着けようとした。

「……じゃあ、いくね」

神様、お願い。奇跡を起こして！ このままさよならだなんて、そんなの絶対にイヤなの！

カラン、と軽い音を立てて転がった玉の色は白。

「ほら、残念賞のティッシュ。終わったならそこ退けよ。待ってる人いるんだから」

商店街のハッピーを着た彼は無情に終わりを告げて、わたしを台の前から押しのかけた。

わたしは渡された三十一個目のポケットティッシュを胸に抱えて途方にくれた。

……二等賞のクマのぬいぐるみ、すっごく欲しかったのに。ぐすん。

-----  
初出：

「真冬のさよなら」 三毛猫

<http://texpo.jp/texpo/disp/41988>

「もう一度、祭りをやろう」

豆腐屋の店主が言った。

「前回の祭りで壊れたアーケードも、まだ直ってないですよ」

八百屋が商店街の天井を指し示す。連合会長は、とうの昔に行方をくらましていた。残った店主たちで、なんとか営業できる程度に修繕したのだ。

「次は床が抜けるかも知れないな」

魚屋の言葉に、皆はヒビの入ったタイルに目を落とす。

「そこのモールの日曜市に、出店してみたんだけどね」

惣菜屋のおかみが口を開く。

「一日で惣菜が五十パックも売れたわ。ここじゃあ一つも売れない日もあるのにね」

店主たちは深い溜息をつく。客が来なくなって随分と経つ。店をたたみ他の職に就いた者、大型複合施設に店舗を移した者、徐々に店も少なくなり、残るは物好きな店主たちだけとなった。

「懐も厳しくなってきたし、これで最後の祭りだ」

「また商店街が壊れたら、どうするんです」

「そんなときゃ公園にゴザ敷いて、青空市でもやるさ」

アーケードの入口に看板がかけられた。赤地に白抜き文字で、祭りを知らせる文言が記されている。店主たちはそれぞれの感慨を持って、それを眺めている。

「それだけしか売るもんがねーのかよ」

肉屋が洋品店のワゴンを指して笑う。

「仕入れる金もないんだよ」

繁盛していた頃に使われていた、一畳ほどもあるワゴン。その中に子供用の手袋が一双。

「お、これ買おうかな。今度孫が生まれるんだ」

酒屋が小さな手袋を手取る。

「じゃあ、金があるじゃねえか。しょうがねえなあ。お前んとこで酒買ってやるよ」

本当はもう随分と前から、そうになっていたのだ。惣菜屋が八百屋や肉屋で買物をし、他の店主がそれを買ひ、といった具合に。外からの客など、最後に来たのはいつだったろうか。

そんなことは、分かっていた。

分かっていたけれど、彼らはまだここに居る。

-----

初出：

「最後の祭り」 山田佳江

<http://texpo.jp/texpo/disp/41989>

<http://yamad.dtiblog.com/blog-entry-72.html>

夫が里帰り中の私と独身の弟が身軽だった事もあり、両親の誘いを受けて週末は久方ぶりの帰郷となった。その日の夕食が鍋に決まると私と弟が買出しに行く事になった。

近所の商店街は昔のまま時間が止まっているかのようだ。

何鍋にするのか聞く弟に、私は「すき焼き」と決然と答え、材料を指で数えながら商店街を歩いてゆく。

肉屋で肉を買い、八百屋で白菜を求める。

「もしかして、江藤君？」

弟が春菊を手にとっていた所で、八百屋の女性が恐る恐る聞いてきた。

「智美ちゃん？」

誰？ と私が耳打ちすると弟は小声で「高校時代の同級生」と答えた。

「久しぶり」

「うん。結婚したって聞いたけど……」

「今は独身。母が寝込んでしまってね、こうして店を手伝ってるのよ」

二人の空気から事情を悟った私は「先に行ってるからね」と気を利かせて買い出しを続けた。

商店街ではどの人も優しく、暖かい。陽気な挨拶に笑い声。嘘くさいと思いつつ半分では安心する。

弟が追いついたのは私がアーケードを出る頃だった。

「色々おまけしてくれたから、今夜のすき焼きは豪勢だな」

「あんたは智美サンと一緒にだと思ってた」

「いや、家族団らんが一番だろ」

嘘くさい事を真顔で言い、弟は両手一杯の荷物を振り回す。私もそれを真似てみる。

買い物袋を振り回しながら、私は家族にはなれなかった夫の事を考えた。

「みんな良い人だよな」

「うん」

「莫迦だよな。全部が終わる直前になって優しくなろうだなんて」

「うん。バーカ、バーカ！」

「姉ちゃんもバカだ、このバーカ！」

超新星爆発によるガンマ線バーストは間もなく地球に到達するという。誰かを傷つける事になっても最後はいい人間として終わりたい、悪い事ではない筈だ。

これから家に帰って、私達は両親と鱈腹すき焼きを食べる。そして、思い出話を沢山して。それから、それから――。

もう子供に帰ってしまおう。幼い頃のように何も考えずにふざけあいながら私は弟と懐かしい家路を辿った。

<終>

-----

初出：

「優しい週末」 アマモリトオル

<http://texpo.jp/texpo/disp/41794>

<http://p.booklog.jp/book/3080/page/776335>

商店街の向こう側、閑静な郊外にカラフルなマンションがありました。  
赤人、緑人、紫人、灰人、そこに暮らす人は色々でした。  
皆それぞれ手袋をしてました。  
なぜならば、手袋はこのマンションの「鍵」のようなものなのでした。

住人のひとは、手袋に手をかけていました。  
「もう、ここから引っ越しますので、外しますね」  
そうって、みんなの前で手袋を外しました。  
すると、青く染まっていた身体が透明になっていきました。

マンションは、住人の色によって彩られていたのです。  
住人がひとりひとり消えていくに従って、ぼつりぼつりと単色になり、  
最後には誰もいない、透明になっていくのです。

マンションを離れ、時代の変化を背中に浴びつづけていると、  
身体の透明度はしだいに濁っていくのです。  
属性に束縛されない一軒家は自由でしたが、少し孤独をとまいません。  
濁ったり孤独を感じていると、何だか辛くなるのです。  
そういうときは、卒業写真を開くように、密室で手袋をするのです。

下の公園で、こどもたちがカラフルなパレードをしていて、  
親たちの井戸端会議を困んでいる景色が浮かぶのです。  
それは万華鏡のような動きをするのです。

その美しい風景が過ぎ去ると、遙か彼方で確かな桃色を見つけるのです。  
「おーい」  
誰かが同じように手袋をして、桃人がこちらに手をふっているのです。  
「お元気ですか？ごきげんよう」  
そして、すぐにその色は透明になって、周りに溶け込んで見えなくなるのです。

(桃人もマンションで一緒に過ごしたひとりなのかな)  
そう思うと、濁っていた透明度も少し晴れたような気がするのです。

最後に、不思議なことがひとつありました。

それは自分の身体が何色なのか、自分で知ることができないのでした。

おしまい

-----

初出：

「住人と色」 木林森太郎

<http://texpo.jp/texpo/disp/35392>

<http://goo.gl/Zq19C>

私は、12月23日の女。

彼がタクシーに手袋を忘れた。

彼女から誕生日にもらった大切な手袋だという。

私は真っ青な顔で電話をしている彼の背中をぼんやりと見ていた。

ついさっき、深夜の小さな駅前商店街で彼と私はタクシーを降りた。

ささやかなクリスマスのイルミネーションはすでに消えてしまっていた。

何時に消さなくてはいけない、というきまりがあるのかしら？

この商店街の裏手に私たちがいつも行くホテルがある。

確か、彼女の家もこの近くだった。

「罪悪感はないの？」

心の中にそんな言葉が浮かぶ。

でも、彼に聞いているのか、自分自身を問い質しているのかわからない。

雪が降り始めた。

私の両手は手袋をしていても氷のように冷たかった。

「ごめん、もう1件かけてみる。これで最後にするから」

私たちはさっきまで乗っていたタクシーの所属する会社を覚えていなかった。

電話ボックスに据え置かれた電話帳を調べながら、彼はすでに何件ものタクシー会社に電話していた。

何て説明しているんだろう。

「タクシーに手袋を忘れたのですが、御社のタクシーで手袋の忘れ物があったという車はありませんか？」

こんな説明で探してくれるだろうか。

いっそ見つからなければいい。

私がまったく同じものを買ってあげる。

彼女は自分がプレゼントした手袋を彼がつけていると思うだろう。  
けど、それは私がプレゼントしたものの。

私の手袋の上に雪のかけらがひとひら舞い降りてきた。  
電話を終えた彼の左手が私の右手をとった。  
ふたりの間で雪は静かに溶けて、同時に私の中の悪魔も影を潜めた。

私は、12月23日の女。  
私は、都合のいい女。

でも、それでもいいって思ったから、私はここにいる。

初出：

「12月23日、深夜」 冬雨

<http://ncode.syosetu.com/n0213z/>

今日で最後にしよう。俺はそう心に誓った。

待ち合わせの西口にはチカが冬服のセーラー服にマフラーをして立っていた。俺の姿を確認できたのか、チカがこちらに手を振ってくる。俺は小さく手を上げそれに応えた。

チカと俺は手を繋ぎながら高崎の街を歩く、郊外に大型ショッピングモールが出店したおかげで、今は昔ほどの活気がこの街にはない。だが、チカにはそんなことは関係ない。嬉しそうに色々な店で服を選んでいる。今日もデートの目的はショッピングだった。

俺たちは歩きながら中央銀座へと向かった。

ここは最近映画のロケで使われたりするアーケード街だ。チカはそのことを知らない。

「ねえ、映画観に行かない？」チカが突然言った。俺は困った。東口にシネコンが出来た影響で今の中央銀座には映画館がない。そんな困っている俺にチカは気が付いたのか話を変えてきた。

「じゃあ、あの美味しいチーズカツ食べに行こうよ。店名なんて言ったっけ？」

チカその食堂ももうここにはないんだ。

俺は今このタイミングしかないと思った。

俺はチカの華奢な両肩を掴むと彼女の大きな瞳をじっと見つめ静かに語り始めた。

「チカ、よく聞いてほしい」「やだ！！」「いいから聞いてくれ、君はもうこの世界の人間ではないんだ」「なに？変なこと言わないでよ」そう言うとチカは視線を逸らした。俺は今度は強い口調で言った。

「チカ、君は17年前に死んだんだ！！」

チカは大きな瞳を更に大きくし俺を見つめている。その瞳に涙が溜まっていく。俺はチカの瞳を見つづけた。「さようなら」チカがそう呟くと一緒に何度も歩いた街から消えていった。

この17年間、チカはずっと17歳のままだった。

俺は毎年年を重ね34歳になっていた。

俺は両手にはめたチカから貰ったボロボロの手袋に目をやった。

手袋に涙が何滴も落ちた。

初出：

「今日で最後にしよう」 ジュニー

<http://texpo.jp/texpo/disp/42114>

闇の中をとぼとぼと歩いているとそれはひょっこりと現れる。

入り口には看板が掲げられており最初の二文字は判別できぬが、あとは錆びたような字で銀座商店街と書かれている。

様々な店が立ち並んでいるのだが、果たしてこれが店なのかと問われれば答えに窮してしまう。商店街と銘打っている以上は店なのだろうけれども、気狂いの作品展ともつかぬものもばかりだ。

例えば三段の棚に面をかぶった猫が整然と並んでいる店がある。天狗に火男、般若に悪尉、みなそれぞれ違った面をつけ正面を向いている。その猫どもは皆背筋をしゃんと伸ばし、動かない。剥製ではないかと思ってしばらく見ていると僅かに尾や耳を動かすのである。

店主と思しき男は狐面で宮司のような出で立ちである。この男もまた奥に座って背筋をしゃんと伸ばし、動かない。

また別の店では暗闇にポツンと手だけが浮いている。店の中はまるで見えず、白い女の手だけが手招きをしているのだ。

しばらく歩くと木の格子の向こう側で艶やかな着物姿の女郎が座っている。後ろを向き艶っぽいうなじを覗かせているのだが、いつも顔を見ることができない。

向かいには皮を売る店がある。店頭には手袋と銘打った人の手の皮がぶら下がっている。

古びた地蔵やら卒塔婆で雑然とした店、碧い金魚が並ぶ店、深い穴のある店。

早くここを出なければと足を速めるのだが出口は一向に見えぬ。ならばと思って振り返ってみても入ってきたはずの入口が見えぬ。

店と店との間は隙間などなく、どこにも抜け道はない。店先の老翁が快活に笑い出す。どこぞで犬が吠え出す。何かか軋む音がする。眩暈がする。

目覚める。

夢だ。

毎度これで最後にしてくれ思うのだが、何度も見るあの夢だ。

恐らく何か買うまでは見続けるしか無いのだろう。

だが、あそこのものを買ってしまったら何かよくないことが起こりそうな気がするのだ。

初出：

「銀座商店街幻想」 茶屋休石

<http://p.booklog.jp/book/40667/page/798139>



クリスマスは明後日なり。

小雪降る商店街は隣邑の巨大ショツピングモールに客をとられて閑散としており、スピーカーの流す音楽、辻の電飾いずれも粗末なれば我が心を慰むるに足らず。

駅前書肆の三階奥にてその頬笑の我が心を貫きしは僅々二時間前のことなり。

余はその時、定期に購読する漫画雑誌及びピンク色売場の凶籍より見出したる麗艶なる幼女の半裸にて緊縛さる表紙絵の一冊を持ち、支払いカウンターに並びき。

いつさいの邪念はもとより思念さえ絶ちて佇みたりしが、

「轟木君」

と我名を以て呼ばれて驚き、顔を起こせば其は懐かしき中学の同級生、市井渚なり。

「こつちへ」

と言われて本を差し出した瞬間、手にした一書の破廉恥なるに気づいて愕然とせしが、渚の手すばやくマニュアル動作して金額を言うのみにて我がエロ本については表情も変えず。黒の袋へ本を収めて、

「じゃあ、お客さんいるからまた後でね」

と言われたる余の心、たちまちにしてその頬笑の虜となれり。

そもまた後でねとは如何なる謂か。

言葉の含意せるところは奈辺か。

渚は地味な中学生にて、余とは親しかりき。卒業後は別の高校なれば逢うことなしに過せしが、今ここで再会するに何らかの天意を思わざるべからず。クリスマスは明後日なり。

弾むごとき我心。

これしきで動揺するを我ながら可笑しく思うも、外の寒気の亦心地よきに、上機嫌に通を闊歩すればいよいよこの運命善哉と叫びたくなり、次はいつ逢えるや、連絡先を聞かねばと様々想念を巡らせるうち、懐かしき面々の十数人が前より来り。みな中学の同級生なり。

「あ」

と一人が余を指させり。他の者は、

「わ」

と言ふ。

結論を述べれば今日これより「魚民」にて同窓会の開催されるを余は知らされざりき。渚は、余も参加するものと思ひて斯く述べたるを余は何を愚かしく勘違いしたもので。

否、何より愚かしきは余の態度なり。何の予定も無き身なれば辞を低くしてでも同行を願い出、以て友無き日常の孤独を改むるに如くなし、渚との邂逅を価値あるものに転化するに如くなし。

然るに嗚呼、これを告げられし余は何の故にや、  
「これから用事があるから」  
と答えたる。

初出：

「岐路の一答」 芋屋だーら

<http://texpo.jp/texpo/disp/42132>

街は戦場と化していた。

どこからともなく現れた軍勢が街を蹂躪した。

ニュースはそれを伝えなかった。

助けは来なかった。自衛隊も、警察も。

住民たちは逃げようとしたが道路は軍隊に封鎖され、それ以外の場所でも突如として現れた壁が行く手を遮った。

何が起きているんだ。誰も答えを教えてくれはしなかった。

季節は冬へと変わり、街は雪に包まれた。

不思議なことに食料と生活必需品、そして武器が知らぬ間に届けられた。物資を積んだトラックが乗り捨てられているのだ。

敵がいる。武器がある。自然と住民たちは銃を手にした。

その前線の一つに、ここ銀座商店街があった。

酒屋でかつての店主たちが古びたストーブを囲んでいた。

「うう、今日は一段と冷えるの」

「昨日も同じ事を言うとしたぞ」

皆、半ば隠居の身、店を畳んだものや次代に託したものばかりであった。

若者はショッピングモール奪還作戦に出払っている。

今ここにいるのは老人たちばかりである。

「まさかこの歳で戦争に駆り出されるとはの」

ストーブの上には薬缶が乗っており中には徳利が入っている。

「この酒を飲むのもこれで最後になるやもしれんな」

「なに縁起でもないことを」

「そういう意味とは違う。この酒は送ってきてくれんのじゃ」

老人たちはほのかに酔っていた。戦場は街の向こう側、遠く離れている。

半鐘が打ち鳴らされた。見張りは金物屋である。

「なんじゃ」

「金物屋ボケとるからのう」

「見に行ったほうが良からう。鐘を鳴らされ続けちゃたまらんわい」

重い腰をあげると「よっ」と一声かけて外套を着こみ、手袋をはめ、冷たい小銃を肩にかける

。

「敵が来ていたらどうする？」

「なあに、返り討ちよ」

「そうさな。冥土の土産に一花咲かせねばなるまいて」

「また縁起でもないことを」

初出：

「銀座商店街幻想」 茶屋休石

<http://p.booklog.jp/book/40667/page/798139>

僕とユキコは、帰り道の学校から商店街の入り口までの間、手をつないで帰る。

どうしてつなぐのかというと、恋人だから。

どうして商店街の入り口までかかというと、恋人だってコトを、家族には隠しているから。

小さな商店街だというのに、ここには2件も八百屋が有って、片方が僕んちでもう片方がユキコちなんだ。親通しがライバルだなんて現代の悲恋だねって言ったら、ユキコに笑い飛ばされちゃったけど。

そんなわけで終業式の日の帰り道も、僕ら二人は手をつないだ。

ちらちらと白い雪が舞っている。ユキコの吐く息が、白くてきれいだ。

「冬って寂しいよね」

「寂しいって、なにが？」

「だって、せっかく手をつないでいるのに、手袋ごしだもん」

ユキコはつないだ手をぶんぶんと振って、膨れっ面のフリをする。ほっぺたが真っ赤だ。

僕は手袋を外して「ほら」とユキコに手を向けた。

「冷たくない？大丈夫？」

「真冬に冷水で野菜を洗ったりするんだぜ、八百屋の息子は冷たいのは得意なんだ」

ユキコも手袋を外して、僕の手を取る。

「そうだね、八百屋の娘も冷たいのは得意だよ」

その手は、温かかった。

「それにしても。どうしてまた、今日は直接手をつなぎたくなかったのさ。昨日までは手袋ごしでも気にしてなかったのに」

「んー？そうだねえ」

そろそろ商店街の入り口が近づいて来た。手を離す地点だ。

「明日から冬休みで、通学も無いじゃない？この辺じゃおおっぴらに手はつなげないし……だから手をつなぐのは、今年は最後かも知れないから。最後くらい、ちゃんと繋ぎたいなって」

さっきまでつないでいた手を小刻みに振りながら「じゃね！」とユキコは笑った。

さっきまでつないでいた手を振り返しながら、来年までのほんの数日がとても遠いなと思った

。 さっきまでつないでいた手は、いま、とても冷たい。

初出：

「つないで」 たきてあまひか

<http://amahika.tumblr.com/post/14396288074>

ホビットのシーフであるデップの先導で俺達パーティは遺跡を進む。

「待って」

小さいが耳に届く声、エルフのマチだ。彼女が唱えていた生命探知の魔法に反応があったのだ。

「またクソ敵か？」

ドワーフ戦士のブルが鼻息を荒げマチに訊く。

「違う。でもこれは一体……」

マチの困惑を見かねた先導のデップが俺に顔を伺う。

「……ナギ、どうする？」

「ナギ殿にお任せします」

マチが自信なさげにそう言う。

「――行こう」

俺の一声で方針が決まった。ブルが俺の肩を叩く。

この遺跡から宝を持ち帰れば俺の帰りを待つ妻子にも少しは夫や父親の役割を果たせる、そんな思いに背中を押されたのだ。

これが最後。そう胸に刻みつけ遺跡の奥へと進んだ。

林を抜けると風景が変わってきた。雑多な建築が乱立し、その入り口には異国の文字が記されたゲートがある奇妙な遺跡だ。

先導のデップも警戒して歩みを緩める。この先に行けば終わり、そんな予感が背筋を凍らせた。

デップ、止まれ！

そう言おうとした直前、デップの皮手袋はゲートの柱に手をかけていた。

「何やってんのタカシ？」

デップの前に幻影が現れた。

「ママ！」

その幻影に無邪気な声で答えたデップはゲートを潜ると黒髪の男の子へと姿を変えてしまった。

「貴様、仲間に何をした！」

幻影を切り捨てようとしたブルにも新たな幻影が迎える。

「キミちゃん、帰ろ？」

「お父さん！」

ブルの声は既に彼のものではない。姿も可愛い女の子に変わっていた。

「ウソよ、こんな事って！」

マチの悲鳴も幻影の呼びかけよってかき消えた。マチは太った少年になった。

「バカな！」

俺は叫んだ。仲間が皆子供に変わるなんて。だが俺は変わる訳にはいかない、妻と子が待っているんだ。

しかし目の前のゲートに書かれてある文字は『よいのみや商店街』としっかり読め、その奥の通りからは肉屋のコロッケの香りが鼻を刺激する。何なのだ、これは！

「違う！」

恐れを振り払うようにもう一度叫ぶ。だが――

「ゆうちゃん」

そう呼ばれた瞬間、張り詰めていた俺の意識は急速に溶けていった。

「どうしたの？」

「忘れちゃいけない大事な『やくわり』があったような気がして」

「何言ってるの、ヘンな子ね。ほら晩御飯はあんたの好きなハンバーグよ」

「やったあ！」

初出：

「プレイ・ア・ロール」 アマモリトオル

<http://p.booklog.jp/book/3080/page/808861>

「何でよ一緒にxxx行こうっていったじゃない！」

「何だよ俺だってxxに会わせてかったさ！」

年末だ。言い換えれば、師走も最盛期。心急ぎ苛立つ人々の増える時節なれど、この男女の口論はとりわけ激しかった。大声自慢の商店街の呼び込みが、たじろぐ程に。女の方は臨月。各々両腕に大きな買い物袋と、福引き券を多数。叫ぶ言葉はなぜか異星語混じり。

この際、翻訳機を通してお聴き頂くべきだろう。

「だからさ、悪かったと思って色々買ってやってんだろ？」

「何よ半分は自分の《地球》みやげのくせに！ 私なんて《テキスポ語》まで覚えたのよ？」

「仕方ないだろ、お前あの《帰還船》にはデカすぎんだよ」

喧しくやり合いながら交互に八角のガラポンを回してゆく。余程クジ運がないのか、台に積まれるのはティッシュばかり。

粒子嵐による銀河ハイウェイの長期閉鎖まで、もう間もないのであった。迂回路もなくはないが、帰星を考える者らにはこれが最後の機会となる。

「なっちゃんの彼氏は帰らないんだってよ？ いいわねー、これだから《マザコン》は！」

途端、男女の間に不穏な空気が流れる。

売り子が声を張り上げた。「あの！ あと一回です！」

「分かった。次にもし当たりが出たら、俺も《地球》に残る」

「ティッシュだったら即絶縁ね。せいせいするわ」

女がさっと手袋を取り払い、薬指から抜いた指輪を台に叩きつける。男もそれに倣う。

「さあ、勝負！」

ガラポンのレバーに、二人手を重ねた。

一一音が出ない。不思議がって二度回すが、やはり何の音もしなかった。

世話役らしき男が慌てて顔を出し、頭を下げる。

「すみませーん玉切れのようで！ お詫びにこちらの券を差し上げます、新年もどうぞ、ごひいきに！」

あの二人、今頃券を見て驚いていることだろうー。

【特別ご搭乗券】 テキサポ星行き

離陸予定：地球時間 2012年×月×日

機種別：貨物（地球人スキン搬送用）

※空コンテナ転用のため快適な乗り心地は.....

初出：

「さよなら、テキサポ星人」 U. C. O.

<http://ucoo.web.fc2.com/hall1/goodlucktexpian.html>

かつての賑わいも今は昔。歴史を誇る埼玉県川越市南古谷にある波打ち際商店街も大型ショッピングモールの相次ぐ出店とこのところの不況であえなくダウン。すべての商店主がマンション建設を企む大手不動産に土地を譲渡し、年内でその歴史に幕を下ろす事となった。そこで年内いっぱい商店街を挙げてこれで最後とばかり大セールを行う事に。これで店じまいだもってけどロボーとばかりに市価の三割四割引は当たり前モノによっては七割引まであるというから商店街はたちまち押しな押しなの大盛況。おかげで年内を待たずに全店内はすっからかんのガーラガラ。やれやれ恩返しがいくらかできたんだべいかと商店主たちは胸をなで下ろしていたのだが、闇討ち洋品店の婆さんがぼつりつぶやくあーら手袋だけ売れんかったのうもう冬なのに。仕方なく残った手袋だけを婆さんが仕舞おうとするとと突然鬼が来て手袋を裏返してはめると婆さんを六回ぶちそのまま去っていった。

初出：

「波打ち際商店街」 ひやとい

<http://ana.vis.ne.jp/ali/antho.cgi?action=article&key=20111219000029>

## 投票結果

---

というわけで、テキスポはぶっ壊れてしまいましたが、  
ぶっ壊れる直前の☆投票状況が、グーグルキャッシュで拾えたので、  
そちらをもとに、投票結果を発表いたします。

グランプリ ☆投票第1位

「さよなら、テキスポ星人」 U. C. O.

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/809444>

特選 ☆投票第2位

「つないで」 たきてあまひか

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/809442>

特選 ☆投票第3位

「これが最後」 みる

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/777052>

入選 ☆投票第4位

「住人と色」 木林森太郎

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/777056>

入選 ☆投票第5位

「今日で最後にしよう」 ジュニー

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/794996>

入選 ☆投票同5位

「最後の祭り」 山田佳江

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/777054>

主催者選

「帰郷の際に」 七篠史明

<http://p.booklog.jp/book/39623/page/774902>

なお、テキスポ死亡、モリタポ制度崩壊につき、賞タポはございません。

ご了承くださいませ。

## ☆投票結果一覧

---

2011年12月26日 09:37:37 GMT のキャッシュから発掘した結果です。

- 1) 「ヒューマンライト」 シゾワンパー 3.50
- 2) 「買い物」 胡曼堂書房 2.57
- 3) 「帰郷の際に」 七篠史明 3.14
- 4) 「Immortal Man(不老不死の男の独白)」 香吾悠理(エビル 3.43
- 5) 「これが最後」 みる 3.89
- 6) 「真冬のさよなら」 三毛猫 3.43
- 7) 「最後の祭り」 山田佳江 3.67
- 8) 「優しい週末」 アマモリトオル 3.43
- 9) 「住人と色」 木林森太郎 3.71
- 10) 「12月23日、深夜」 冬雨 3.57
- 11) 「今日で最後にしよう」 ジュニー 3.67
- 12) 「銀座商店街幻想」 茶屋休石 3.29
- 13) 「岐路の一答」 芋屋だーら 3.33
- 14) 「銀座商店街戦争」 茶屋休石 3.17
- 15) 「つないで」 たきてあまひか 4.00
- 16) 「プレイ・ア・ロール」 アマモリトオル 3.20
- 17) 「さよなら、テキスポ星人」 U. C. O. 4.20
- 18) 「波打ち際商店街」 ひやとい 3.00

なお、☆投票は、テキスポという小説サイト上に実装されていた投票システムです。

(5点満点)